

翔ぶがごとく、されど・・・

杉山 毅

本誌が10号を迎えることになった。時の経過の早さに、いまさらのように驚いている。原野さんからその記念になにか書けと言われて、あまりよくも考えずに引き受けてしまったが、月並みなことしか思い浮かばなくて、じつは困っている。しかし、原野さんや当時の教室助手の武田さん・院生諸君と相談して、どうにか本誌を刊行にこぎつけた頃のことを思い出すと、よくぞ10号まで続けてくださった、という思いがつよい。わたしは、6号と7号とのあいだで、早々と広島大学を辞してしまったので、それ以後今日までのことは、すべて原野さんを中心として、新しい院生諸君や会員諸氏の大きな努力に負っている。そうした皆さんの研究への熱意、本誌を持続させようという意志、にまず感謝の念を表したい。

本誌創刊の二つの目的については、本誌第1号の「あとがき」に書いた通りである。その一つは院生諸君の研究成果に発表の場を与え、就職の際の一助にしたいということであったが、その目的は果たされているだろうか。残念ながら、10年前よりいっそう就職難の時代が続いている現状では、本誌に書いた論文のおかげで就職ができたというようなケースは、まだ少ないかも知れない。しかし、挫けないでほしい。現状が厳しければ厳しいほど、本誌を道場の一つとして、それぞれが自己の研究能力を高めてくださることを期待している。他方、卒業生を含む教室内外の会員諸氏がときに意欲的な論考を寄せてくださった結果、研究誌としての質の向上にも近年見るべきものがある、といまは現場を離れた気安さと多少の客観性をもって言えそうである。同時にそれは、フランス文学教室と卒業生とのあいだのつながりの強化、という本誌創刊時の第二の目的にも、多少の貢献をしているものと思いたい。

本誌創刊後10年を経た今日、まず脳裏に浮かぶ感慨は、始めにも述べたように、まるで翔ぶがごとき時の経過の早さである。しかし、われわれの歩みは牛のようでありたいものだ。本誌を支えてくださる研究者たちが、さらに地道な研鑽を積み重ね、それぞれ大樹に成長してくださることを、それとともに本誌も不死鳥のように羽ばたき続けることを願望する。本誌の歩みを、かりに東海道五十三次の道程に譬えれば、江戸の日本橋から10番目の宿場である箱根に、いまやっと着いたばかりというところである。京都・三条までには、まだ難所も多く、40を越える宿場を残している。本誌50号の刊行をこの目で見たいなどという妄言は慎むが、せめて20号ぐらまでは、ついに行きたいものである。本誌の健闘を切望してやまない。

(1e 25 août 1991)